

平成21年度第1回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2009年10月～2010年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、「屋久島南付近での変動」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

今後の見通し(2009年11月～2010年3月)のポイント

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年を上回る。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年並み。
- (5) ウルメイワシは前年並み。
- (6) カタクチイワシは前年を上回る。

※「前年」は2008年11月～2009年3月。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 今井

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

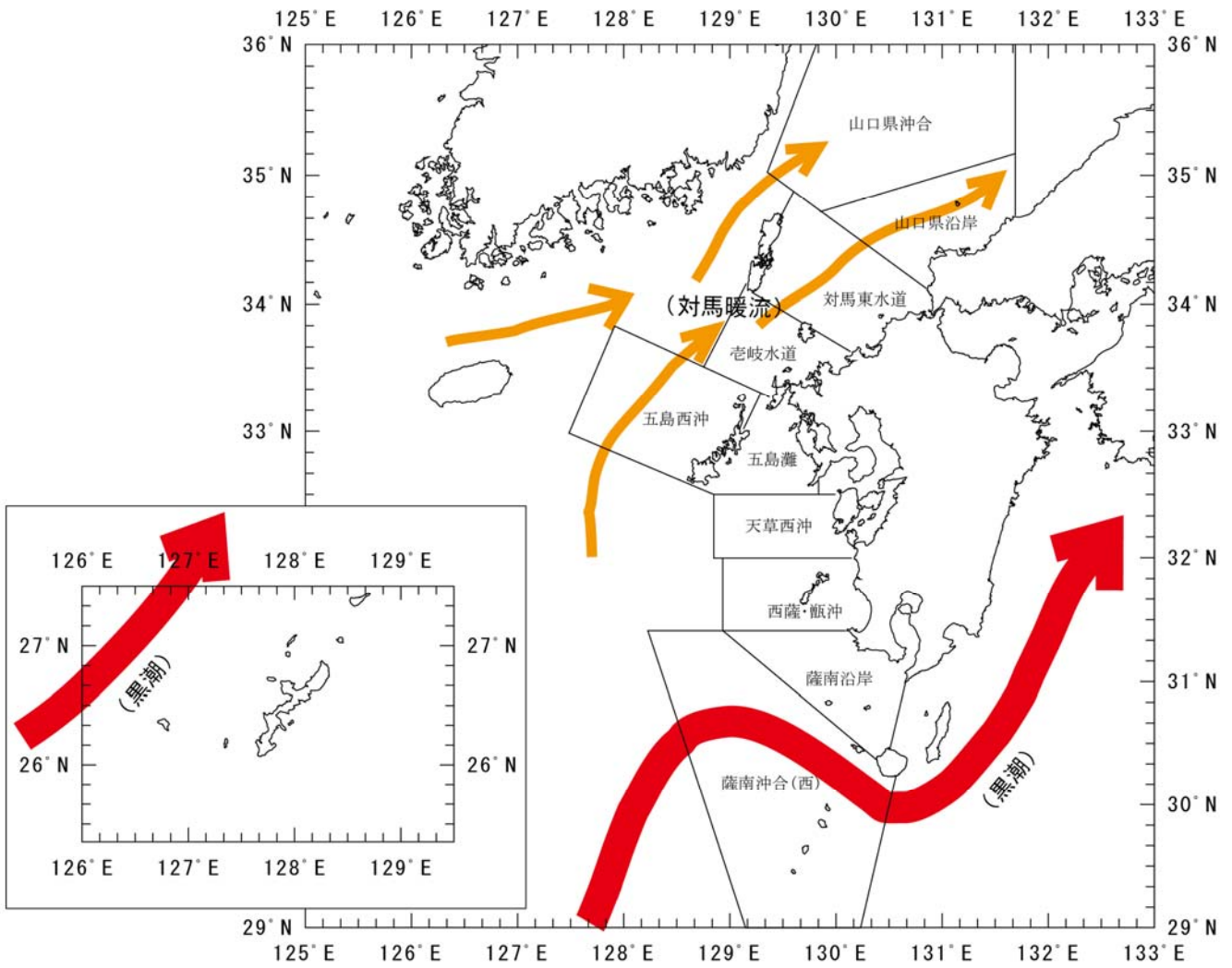
電話：098-860-1600、ファックス：095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2009年10月～2010年3月）

（1）海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近での変動」で経過する。

（2）表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上で「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2009年4月～9月）

1. 大陸棚上

（1）海面水温

北部：4月「平年並み」、5月「かなり高め」、6・7月「平年並み」、
8月「やや高め」、9月「かなり高め」。

南部：4・5月「やや高め」、6・7月「平年並み」、8・9月「かなり高め」。

2. 黒潮流域

（1）海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、春季、夏季ともに東偏り。

流量は、春季は平年よりやや多め、夏季は平年並みで経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、4月「接岸傾向」、5・7月「離岸傾向」、
他の月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過。

（2）海面水温

4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「やや低め」、7月「平年並み」、
8月「かなり高め」、9月「はなはだ高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

（1）表層水温

山口県沖合：4・5月「かなり高め」、6月「平年並み」、7月「やや高め」、
8月「平年並み」、9月「やや低め」。

山口県沿岸：4月「かなり高め」、5月「はなはだ高め」、6月「平年並み」、
7月「やや高め」、8・9月「やや低め」。

対馬東水道：4・5月「やや高め」、6月「平年並み」、7月「やや高め」、
8・9月「やや低め」。

壱岐水道：4月「平年並み」、6・8月「やや低め」。

五島西沖：4月「かなり高め」、6月「平年並み」。

五島灘：4月「平年並み」、6月「かなり高め」、8月「かなり低め」。

天草西沖：4月「やや高め」、5・6月「平年並み」、8月「やや高め」。

西薩・甌沖：4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。
薩南沿岸：4・5月「やや高め」、8月「平年並み」。
薩南沖合：4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「やや高め」。
沖縄島南東：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「やや低め」、
7月「かなり低め」、8月「かなり高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4・5月「やや低め」、6～8月「平年並み」、9月「やや高め」。
山口県沿岸：4月「かなり低め」、5～8月「平年並み」、9月「やや高め」。
対馬東水道：4・5月「やや低め」、6～8月「平年並み」、9月「やや高め」。
壱岐水道：4月「やや低め」、6月「平年並み」、8月「やや高め」。
五島西沖：4月「はなはだ低め」、6月「平年並み」。
五島灘：4月「はなはだ低め」、6月「平年並み」。
天草西沖：4・5月「平年並み」、6月「やや高め」、8月「平年並み」。
西薩・甌沖：4・5・8月「平年並み」。
薩南沿岸：4月「やや低め」、5・8月「平年並み」。
薩南沖合：4月「やや低め」、5・8月「平年並み」。
沖縄島南東：4月「やや低め」、5・6月「平年並み」、7月「かなり低め」、
8月「やや低め」。

3. 現況 (2009年9月下旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「やや高め」、南部「やや高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「離岸傾向」。海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「やや高め」。

(註) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」：約22年に1回程度の出現確率
「かなり」：約7年に1回程度の出現確率
「やや」：約3年に1回程度の出現確率
「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し（2009年11月～2010年3月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2009年級群（2009年生まれ））、1歳魚（2008年級群）、2歳魚（2007年級群）。
魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は低調だった前年を上回り、沿岸域の漁況は前年を上回り平年並み。
- (3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）及び19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。
- (3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）及び29～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。
- (3) 魚体：25～30cmの0歳魚（豆・小銘柄）及び29～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。2月以降には、沿岸域で33～40cmの2歳魚以上（中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

- (1) 来遊量：前年並みで平年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：沿岸域で散発的に漁獲される。
- (3) 魚体：15～20cmの0～2歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

- (1) 来遊量：前年並みで平年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。
- (3) 魚体：15～20cmの0歳魚（中羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

- (1) 来遊量：前年を上回り平年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：漁期は後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。
- (3) 魚体：10cm程度の0歳魚（大羽銘柄）が主に、5cm程度の0歳魚（小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2008年11月～2009年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。「沖合域」は大中小型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2009年4月～8月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

日本海・東シナ海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため、資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年と同程度の高い水準で経過し、2004年にかけて資源量は増加した。2005年以降の加入量水準は近年では低い水準となり、資源量も減少したが、2008年の加入量は増加したとみられ、資源量もやや増加した。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005～2007年は減少した。2008年はやや増加し、約13万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代には比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減した。1998～2000年にかけてさらに減少し、2000～2007年は低い水準で横ばい傾向を示していた。2008年のやや高い加入量のため、資源量は2008年に増加したものの、依然として低い水準にある。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半には27万～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年には13万～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年には41万トンに達したが、1997年には21万トンに大きく減少した。その後もさらに減少し、2000～2006年は90千トン前後で推移していたが、2007年には106千トン、2008年には120千トンと緩やかな増加傾向を示している。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2008年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、2004年級群の高い加入量のため、資源量は2005年に高い値を示したが、その後は減少傾向を示している。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の88千トンが漁獲された後、再び5万トン前後の漁獲が続いたが、2004年には31千トンに減少し、2005年には76千トンに増加するなど、近年は変動が大きい。2008年は37千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001年には過去最低水準となった。2004年以降は極めて低い水準ながらも増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は増加傾向にあり、2007年の漁獲量は14千トンと近年では最も多かった。2008年の漁獲量は11千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

対馬暖流域において、1970年代後半と1980年代後半に資源量が多く、1980年代前半および1990年代後半には少なかった。1990年代後半から2000年まで資源量は漸減傾向にあり、2001～2007年までは資源量がやや増加したが、2008年は再び減少した。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1970年代および1980年代には資源変動は比較的安定していたが、1990年以降に資源量が徐々に増加しはじめ、1997～1999年は極めて高い水準にあった。2000年以降は、資源量は再び安定して推移していると考えられていたものの、2009年冬季以降の水揚量が減少している。

2. 漁況の経過

2009年4～8月の大中型まき網漁業の漁場は、主に対馬沖および東シナ海南部であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計4万5千トンで前年（2008年4～8月、4万1千トン）並みであった。マアジは2万1千トンで前年（2万1千トン）並み、さば類は1万7千トンで前年（1万トン）を上回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、北部（山口県～佐賀県）においては前年並みから上回っていたのに対し、南部（長崎県～鹿児島県）では前年を下回った。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年を下回り、平年並みであった。漁獲の主体は25cm以下の0歳魚であった。ゴマサバは、前年並みで、平年を下回った。5～7月は33～38cmの2・3歳魚が主に、24cm以下の0歳魚も漁獲され、8月以降は29cm以下の0歳魚が主に漁獲された。マイワシは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は15cm以下の0歳魚であった。ウルメイワシは、前年を上回り、平年並みであった。漁獲の主体は15cm以下の0歳魚であった。カタクチイワシは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は7～13cmの小羽～大羽（0・1歳魚）であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、11～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体で、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。2008年級群は2007年級群を上回る豊度と考えられる。2009年級群については、2009年2～4月に東シナ海南部～九州沿岸域で行った仔稚魚分布調査では前年を下回ったものの、6月に東シナ海～山陰沿岸域で行った幼稚魚分布調査では前年と同程度とみられた。8・9月に行なわれた計量魚群探知機の調査結果では、2009年級群は2008年級群を上回る豊度と考えられた。これらから、0歳魚（2009年級群）は前年と同程度か上回り、1歳魚（2008年級群）は前年を上回り、2歳魚（2007年級群）は前年並みで、全体の来遊量は前年を上回ると見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE（1日1隻当り漁獲量）（参考図参照）は、2005年以降は減少しており、低い水準にある。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は安定している（参考図参照）。来遊量が前年を上回ることを反映して、沖合域の漁況は低調だった前年を上回り、沿岸域の漁況は前年を上回り平年並みと考えられる。

(2) マサバ

例年、11～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。2007年級群の豊度は2006年級群と同程度で、2008年級群の豊度は2007年級群より高い豊度とみられる。2009年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2008年級群より低い豊度とみられる。これらから、0歳魚（2009年級群）は前年を下回り、1歳魚（2008年級群）は前年を上回り、2歳魚（2007年級群）は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、0歳魚が漁獲の主体となることから、前年・平年を下回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、11～3月期には0歳魚（豆・小銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。2007年級群の豊度は2006年級群と同程度、2008年級群の豊度は2007年級群と同程度とみられる。2009年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2008年級群と同程度かやや低い豊度とみられる。これらから、0歳魚（2009年級群）は前年並みかやや下回り、1歳魚（2008年級群）は前年並み、2歳魚（2007年級群）は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、1月までは現在の散発的な漁況が継続し、前年・平年を下回ると考えられる。

(4) マイワシ

例年、11～3月期には0～2歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲の対象となる。2007年級群の豊度は2006年級群より低く、2008年級群の豊度は2007年級群より高いと考えられる。2009年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2008年級群と同程度かやや低い豊度とみられる。これらから、0歳魚（2009年級群）は前年並みかやや下回り、1歳魚（2008年級群）は前年を上回り、2歳魚（2007年級群）は前年を下回り、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、11～3月期には0歳魚（中羽銘柄）が漁獲の主体となる。2009年8・9月に行った計量魚群探知機の調査結果では、豊度は前年を大きく上回った。4～8月期の各県の漁獲量と体長組成の経過から、2009年級群の豊度は2008年級群と同程度と考えられる。11～3月期における漁獲量は、前年並みで平年を上回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、11～3月期には11月以降に発生する0歳魚秋季発生群（カエリ・小羽銘柄）と、0歳魚春季発生群（大羽銘柄）が漁獲の主体となる。2005～2008年までの1～3月に大羽イワシの来遊が多かったものの、2009年の同時期の大羽イワシの来遊は少なかった。これは2008年級群の加入量が少なかったことが一因としてあげられる。2009年8・9月に行った計量魚群探知機の調査結果では、豊度は前年を下回った。11月以降に漁獲の対象となる2009年級群（カエリ・小羽銘柄）の漁獲量は4～8月期のカエリ～中羽銘柄の漁獲量と同様に前年並みで推移するだろう。また、1月以降に来遊する2009年級群（大羽銘柄）の漁獲量も平年よりは少ないものの、ほとんど漁獲がなかった前年よりは多いと考えられる。

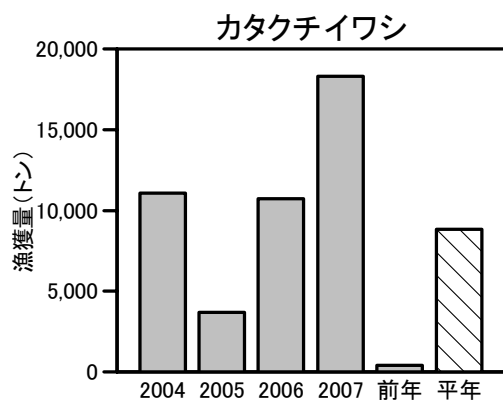
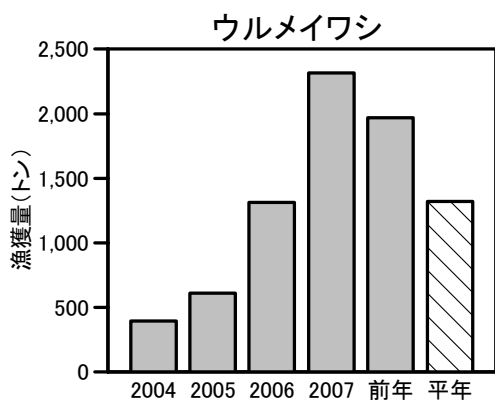
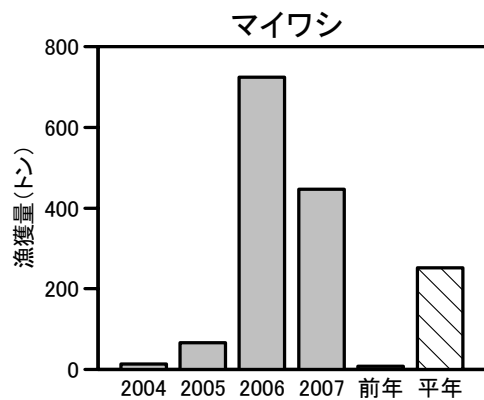
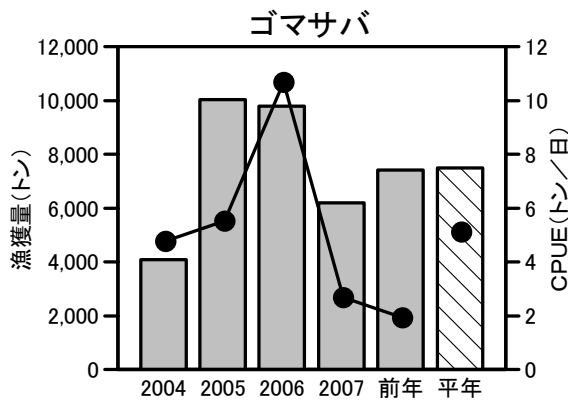
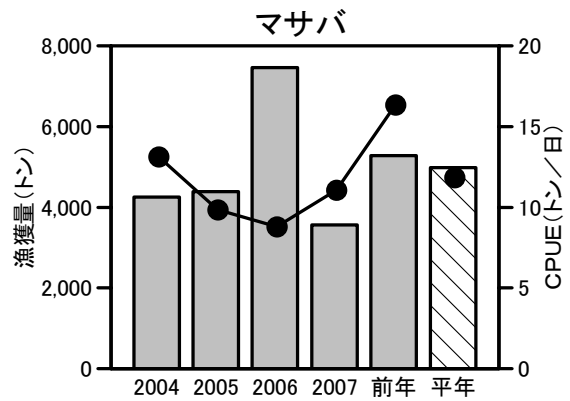
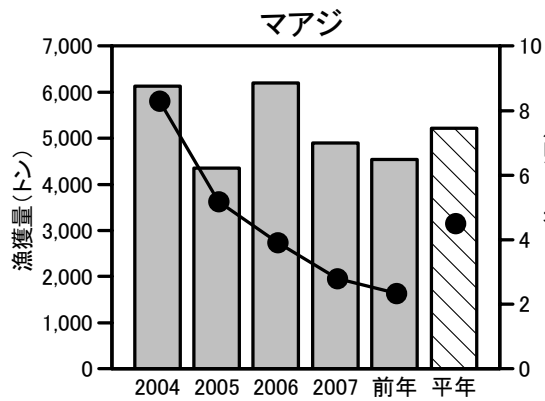
表1. 沿岸域の漁況経過（2009年4～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	<p>中型まき網の主漁場となる見島周辺に漁場が形成されず、島根県境に漁場が形成された。盛漁期の7月の水揚量は平年比51%と不漁であったが、8月は平年比133%と持ち直し、期間中の水揚量は1,786トン、前年比114%、平年比94%であった。</p>	<p>中型まき網で期間中865トンの水揚量があり、前年比255%、平年比313%であったが、ギリサバ(全長25cm以下)が多かった。</p>	
福岡	<p>代表港まき網漁獲量は480トンで不漁であった前年比245%ではあったが、平年比53%と不漁。0歳魚銘柄が多かったが、1歳魚以上の銘柄が少なかった。棒受網の漁獲量は57トンで前年比308%、平年比70%とやや不漁。</p>	<p>代表港まき網漁獲量は151トンで、前年比74%、平年比59%と不漁。当歳魚銘柄が中心。棒受網では漁獲されなかった。</p>	<p>代表港まき網漁獲量は0.3トンで、前年比4%、平年比1%と不漁。</p>
佐賀	<p>前年を上回り、平年並み（前年比132%、平年比96%）。</p>	<p>前年・平年を大幅に下回った（前年比12%、平年比20%）。</p>	
長崎	<p>地域により差があるが、概ね前年・平年を下回った（前年比64%、平年比77%）。</p>	<p>地域により差があるが、概ね前年を下回り、平年並みであった（前年比53%、平年比84%）。</p>	
熊本 牛深港	<p>水揚量は134トンで前年比54%、平年比102%であった。</p>	<p>水揚量は11トンで前年比2%、平年比2%であった。</p>	
鹿児島	<p>主要4港のまき網で、4～5月は豆、小アジ（2008年級群）主体、6～8月はアジ仔（2009年級群）主体の漁獲があった。4～6月は低調な漁模様であったが、8～9月はアジ仔（2009年級群）の漁獲が好調で、前年・平年を大幅に上回った。期間中合計で1,469トンの水揚げで、前年を下回り、平年並みであった（前年比71%、平年比117%）。</p>		<p>主要4港のまき網で、5～6月に、薩南海域で漁場が形成され、まとまった漁獲があった以外は低調な漁模様となった。漁獲の主体はゴマサバ中（2007年級群）であった。期間中合計で5,904トンの水揚げで、前年・平年並みであった（前年比102%、平年比80%）。</p>

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	昨年と一昨年にまとまった水揚量のあった中型まき網の水揚量は0.5トンで、前年比1%、平年比3%であった。湊地区の浮敷網では、例年になく5・6月に当歳魚のヒラゴが142トンまとまって水揚げされ、これにより期間中の水揚量は前年・平年を大幅に上回った。	湊地区の浮敷網は例年8月から小・中羽主体の漁となるが、今期はこれまでになく5月にウルメ仔が20トン水揚げされ、6月に92トンとまとまった漁獲があった。期間中の水揚量は141トンで前年比1,992%、平年比100%であった。	湊地区の浮敷網の水揚量は、小・中羽を主体に720トンで前年比42%、平年比46%と前年・平年を下回った。
福岡	代表港まき網漁獲量は12トンで、前年比4%、平年比15%と不漁。棒受網の漁獲量は38トンで、前年比85%、平年比131%とやや好漁。沿岸の小型定置網では漁獲されなかった。	代表港まき網漁獲量は67トンで、前年比19%、平年比30%と不漁。棒受網の漁獲量は0.3トンで、前年比1%、平年比3%とまき網同様不漁。	棒受網の漁獲量は21トンで、前年比20%、平年比18%と不漁。
佐賀	前年・平年を大幅に下回った（前年比0.1%、平年比0.3%）。	前年を上回り、平年を大幅に下回った（前年比498%、平年比33%）。	前年・平年を大幅に下回った（前年比24%、平年比17%）。
長崎	まったく漁獲が見られなかった。	地域により差があるが、概ね前年・平年を上回った（前年比220%、平年比197%）。	地域により差があるが、概ね前年・平年を下回った（前年比69%、平年比62%）。
熊本 牛深港	水揚量は5トンで前年比91%、平年比7%であった。	水揚量は278トンで前年比327%、平年比68%であった。	水揚量は1,433トンで前年比62%、平年比117%であった。
鹿児島	ウルメイワシに混獲されるのみで、まとまった来遊は無かった。主要4港のまき網で27トンの水揚げで、前年・平年を下回った（前年比63%、平年比7%）。北薩海域の棒受網でも5トンの水揚げで、前年並みで平年を下回った（前年比93%、平年比34%）。	主要4港のまき網で、4～6月は前年・平年を下回り低調に推移したが、7～8月に中羽（2009年級群）主体に好調な来遊となった。期間中合計で897トンの水揚げで、前年を上回り、平年並みであった（前年比127%、平年比96%）。北薩海域の棒受網でも6月から小・中羽（2009年級群）主体に好調な来遊となった。期間中合計で1,280トンの水揚げで、前年・平年を大きく上回った（前年比269%、平年比206%）。	主要4港のまき網で454トン（前年比25%、平年比69%）と、前年・平年を下回り、北薩海域の棒受網では432トン（前年比109%、平年比113%）と、前年・平年並みであった。

注：「前年」は2008年4～8月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター
熊本県水産研究センター	西海区水産研究所
鹿児島県水産技術開発センター	